

海上自衛隊のドルフィン

カレッジ防衛モニター 青木 健史

「ドルフィン」と聞いて「くじら」を思い浮かべる者はあるはずもなく、ましてや100人が100人と「くじら」を連想するものを「イルカ」と呼ぶ者は、普通でないかもしれない。おおよそ公的に「てつこのくじら」とも呼ばれているにもかかわらず、なぜ彼らは自らを「イルカ」と「ドルフィン」と称するのか。

6月20日、私はカリフォルニアで、「ドルフィン」に出会った。と云うと聞かえはよいかも知れないが、そのカリフォルニアは地理的には日本国神奈川県横須賀市で、ドルフィンとは鉄の鯨、海上自衛隊の潜水艦、そして胸に「ドルフィン・マーク」と呼ばれる潜水艦徽章を着けた男たちであった訳である。

冒頭の疑問は私が行きのバスでぼんやりと考えていたことであるが、実際に見学をしてみると、なるほど彼らが「ドルフィン」を称する訳がわかった。一撃で大型艦艇をも破壊する魚雷を備え、時に水上艦や航空機とともに作戦に当る。海に出ればその隠密性、そしてその機動性は完璧。頭もよい上に機動性もあるという、まさに「ドルフィン」であったのだ。

また、艦内を案内してくれた魚雷員の海曹、そして今は米海軍基地となっている旧横須賀海軍工廠及び旧横須賀鎮守府の遺構などを完璧なガイドと共に案内してくれた幹部もまた、「ドルフィン」のような人懐っこい優しい笑顔で、私たちに自衛隊の新たな一面を見せてくれた。そして、見学を終る頃に私は、普段私たちが彼ら優しくも強いドルフィンたちに護られているのだ、という温かい気持ちになることが出来たのだ。

ちなみに、本物のイルカは意外とユーモアを解するらしい。そんなことを考えつつ潜水艦見学を終えたところで、私たちは記念に黒い潜水艦のフィギュアを頂いた。ラバー製で、押すと柔らかく潰れる。私たちが参加者がそれをムニムニ揉んでいると、案内の幹部がこう云うのだった。「押しでも鳴りません。私たちはサイレント・ネイビーですから」。

どうやら、この勇敢な「ドルフィン」もまた、ユーモアを解するようである。



潜水艦の前にて（右側が本人）

潜水艦を見学して

カレッジ防衛モニター 西山 望

カレッジ防衛モニターとして初めての活動が海上自衛隊の潜水艦見学ツアーでした。以前から基地の開放日などに護衛艦を見に度々横須賀へ訪れていたのですが、潜水艦はなかなか触れる機会も、実際に乗員の方々にお話を聞く機会もなかったので今回の活動を通して非常に貴重な体験ができたと思います。

正直、潜水艦は日頃どんな任務を遂行しているか余りよく知りませんが、乗艦前に潜水艦などに関するプレゼンテーションがあったのである程度理解できました。それに加え、普段は滅多に入ることの出来ない潜水艦の艦内まで見学できたことは、これから先、一生忘れることのない経験となりました。

艦内は思っていたよりも広く快適でした。ですが、任務は長期間に亘るものでそれは非常に過酷なものだと感じました。また、潜水艦の持つ大きな特徴である隠密性が国土を全て海で囲まれる海洋大国日本の国防においてどれ程重要か痛感しました。日頃から、国民のため、国のために、深い海の中人知れず任務に従事する彼らを私は尊敬すると同時に誇りに思います。

幸運にも今期のカレッジ防衛モニターとして選考されたので、これからの活動を通して自衛隊という組織の理解を今以上に深められたら良いと思います。

潜水艦見学

カレッジ防衛モニター 増田 知剛

潜水艦に乗ることなんて滅多にある機会ではないと思う。潜水艦は隠密行動する為にある乗り物であり、内部は秘密という場ではないはず。それに防衛モニターという立場で一般人の自分が乗れるなんて、とても嬉しく思えた。

見学した潜水艦は、最初に見たときは思っていたよりも小さくて驚いた。艦内の見学の前に、潜水艦の歴史や海上自衛隊の簡単な説明を受け、潜水艦にあまり詳しくない自分でもそれがどんなものなのかということが理解できた。

潜水艦内部へは垂直梯子を降りていかねばならない。その梯子も5mほど高さがあり、入り口も狭くかなり降りにくかった。自分以外の船舶などにはかなり乗ってきたが、それらとは比べ物にならないほど内部は複雑で、案内がないと迷ってしまうくらいだった。中には食堂、シャワー、もちろんトイレもあり、どれも清潔に保たれていた。区画を区切る丸い金庫扉の様なドアが非常に小さく、そこを通り抜ける時は大変だった。海に潜る潜水艦のため当然どこにも窓はなく、外の様子は全く分からなかった。船という操舵室の様所も見せてもらったが、操舵室の中の機械等も色々と秘密が多いらしく、説明をお願いしても、「それは答えられない(笑)」と返ってくるのが殆どだった。操舵室といっても四方に窓もなくソナーやレーダーなどたくさんモニターが並んでおり、その操舵室の中心に潜望鏡があり、それとレーダーなどで外の様子を把握するらしい。一度は覗いてみたかった本物の潜望鏡も覗かせてもらいとても満足だった。

最後に魚雷発射管のある艦の一番前を見せられた。そこには魚雷やミサイルが並べられており、その隣には寝室に入りきれない隊員の簡易ベッドであった。魚雷の隣で寝るらしく、夏は魚雷がひんやりしていて気持ちいいとの事だった。並べられている魚雷の殆どが埃を被っていて、まだ一度も使われていないことが分り少しショックだった。

潜水艦の中は機械だらけで何となく冷たい印象を抱いていたが、内部は隊員の生活感もかなりあった。全く知らない事だらけだった潜水艦だが、この見学で潜水艦の必要性も理解でき、非常に貴重な体験ができたと思う。